

日本人たちの見た「台風」劇（上）

— 黄禍論問題に留意しつつ —

丸 山 珪 一

目 次

はじめに

1. ベルリン公演——レンジェルと武者小路公共
2. 森鷗外における「台風」と黄禍論
 - (1) 「掠鳥通信」と「台風」
 - (2) 鷗外の黄禍論批判（以上本号）
3. イギリス公演——ローレンス・アーヴィングと坪内士行
4. 帝劇上演とその反響
5. 「台風」論の争点——まとめて代えて

はじめに

ハンガリーの劇作家レンジェル・メニヘルトの日本人劇「台風」は、彼がベルリンでたまたま着想を得て書き上げたものだが、1909年秋ブダペストで上演されヒットした後、次々とヨーロッパ諸国の舞台に上せられ、歓迎された。日清、日露戦争を経て国際政治の場は無視できぬ要因として新たに登場した日本と日本人に対する強い関心が、その興行の世界的成功を下支えしていると思われる。ドラマから、またそれをめぐる論議からは、ヨーロッパ人の日本人に対する変化しつつある眼差しを読み取ることができる。一方このドラマには、ヨーロッパの中心に対して言わば半周辺に位置するハンガリーの作家としての、日本人に対するアンビヴァレントな意識も覗える。前稿「『黄色い猿』の血は赤かったか——レンジェルの日本人劇『台風』と黄禍論問題」¹⁾において、私はそのハンガリー語原作がどのようなものであったかについて、また作品成立の経緯、ハンガリーでの受容の一端、そこにおける黄

禍論をめぐる議論などについて紹介し論評した。各国で上演された「台風」は必ずしも同一のものではないから、単純な比較は成り立たないが、作品の受容をめぐる複雑に入り組んだ「台風」現象に近づくためには、いずれにせよ原作の解明が出発点であるとともに、核心でもある。

ヨーロッパ諸国で「台風」の舞台を見た在外日本人も少なくないだろう。彼らを介して、あるいはマス・メディアを介して、上演の情報はすばやく日本に伝えられ、このドラマに対する関心が掻き立てられた。これは基本的にはヨーロッパ人が自分たちをどう見ているかを知りたいという希求に繋がるものであろう。こうして1914（大正3）年には邦訳も出、1915年にはついに当の日本でも帝劇で上演される運びになった。本稿は、言わば連作の第2部として、何らかの事情からこのドラマに関わりを持つことになった人たち、あるいはこのドラマを見た人たちの体験、印象、感想、批評などの紹介・分析を通して、日本で形成され蓄積されたイメージを明らかにすることを課題とする。その際、前稿に引き続き、黄禍論問題には特別に留意したい。黄禍論を一ドラマの受容の枠内で問題にすることは、論そのものとしてはもとより無理があり、しかも作品自体が必ずしも黄禍論的なものと言えないとなれば、なおさらであるが、それが作品受容の論議にさまざまに絡まりあっている以上、不可避であろう。

先行するベルリンやロンドンでの上演については、日本の新聞や雑誌で伝えられただけでなく、日本での上演および受容の前提として、これに密接に関わるので、ここではもっぱらその観点から取り上げ、できるかぎり詳細に跡づけることにしよう。ドイツとイギリスを含むヨーロッパ諸国での上演そのもの、およびその受容について、そしてそれらの比較検討については、材料が何ヶ国にもまたがって膨大であるために、また筆者の言語能力の限界から、まだまだこれからの仕事である。

1. ベルリン公演——レンジェルと武者小路公共

1909年秋のブダペスト公演をそのまま引き継ぐようにして、早くも翌2月にはベルリン座によってドイツ公演²が行なわれた。これに合わせてドラマの演じられる舞台はベルリンからパリへと設定を移され、ドイツ人登場人物

の名も相応にフランス風に塗り替えられた。女主人公ヘレーネ・ケルナーはエレヌ・ラロシュに、文士のリンドナーはレナール＝ベインスキーに、教授のブルックはデュボンになった。レンジェルにとっては日本人をヨーロッパの大都市におくことが肝要だったから、これらの人物の言行がドイツ人らしいかどうかとか、そもそもこれらの人物によってドイツ人が代表されてよいかどうかといったことで、ベルリン子の神経に障ることのないようにしなければならなかったのである。もっとも、刊行された本³では、たとえば法廷場面での認定尋問の際、トケラモが「ベルリン在住の私人」であったり、日本人のひとりが「私はドイツ語ができません。」と言ったりするなど、フランス風への改装は必ずしも徹底していないが、まさか実際の舞台上でそんなことはなかっただろう。「台風」のドイツ語訳は、モイ・タマーシュたちベルリン在住ハンガリー人仲間の手ですでにハンガリーでの上演に先立って出来上っていたから、慌しい翻訳作業の所為にちがいない。第3幕での検事の論告に少し人種主義的言辞が加味されているところなどを見ると、作品の舞台がパリに移されたのと裏腹に、翻訳がドイツ人観客の雰囲気強く意識していたことが覗えるが、台詞はハンガリー語からのほぼ忠実な翻訳であった。演出も基本的にブダペストでの上演が踏襲されたようである。レンジェルによれば、ベルリン座のルドルフ・ベルナウアーの演出は、彼がブダペストで見た「台風」劇をそっくりベルリンで再現した。主人公トケラモを演じたクレヴィングは、それまでテノール歌手で、これが初めての散文の役回りだった。ベルリン公演はすでに5月末には上演100回を超え、しかも興行中にウィーンに客演までしているから、「台風」の最初の外国公演はまず大成功だったと言ってよいだろう⁴。ここから「台風」の世界制覇の旅が始まる。ベルリン座が客演したウィーンでも、翌年当地の劇団が独自の公演を行った⁵。

ベルリン座での初演の日、『わが人生の書』⁶によると、レンジェルは栈敷席から上演を見もった。自分の作品が外国の観客にどのように受けとめられるか、さぞかし期待とともに不安も大きかったらと思うが、幕が進行するに連れて成功を確信したようである。上演後、作者としての挨拶を求められ、壇上から観衆の大きな拍手と喝采を受けてお辞儀をした。そして壇を下

りと、近くの栈敷から日本人たちが、おめでとうを言いに来て。彼は、武者小路伯と名乗る、そのうちの一人から翌日の昼食に招待され、「生身の日本人」への興味も手伝って出かけて行った。毎朝すじ向かいの建物に出入りしていた一団の日本人たちを見たことが日本人劇を書く発端になったことを彼が話したのは無論である。招待者と客人は、一つの通りを隔ててごく身近にいたことを、ここで初めて知ったことになる。自分たちがきっかけでドラマが生まれたというわけだから、日本人たちも驚いただろうが、レンジェルも驚いたのである。というのも、その建物が日本大使館のもので、出入りしていた人間たちが大使館員であるとは思ってもみなかったのだった。もしあの時そのことを知っていたら、不意にひらめいた考え全部がしぼんでしまい、ドラマは決して生まれることはなかっただろう、と彼は追想している。ふつう大使館と言うと、堂々たる建物で、日の丸が掲げられていたりもするから、すぐにそれと分かるはずだが、目の前に住んでいたレンジェルが気づかなかったのは、後で見る武者小路の回想も「大使館の事務所」というふうな書き方をしているように、大使館そのものとは別だったからだ⁷。

さらに『わが人生の書』は、興味深いことに、その武者小路伯が「台風」の日本語訳を引受けた、と書いている⁸。事実このことは、ドイツの新聞にも報じられた。1910年2月26日付けの『ベルリン日報』は、「日本における『台風』」という小見出しの次のような記事を載せている。

周知のように、ハンガリー人の著者メルヒオール・レンジェルの手になり、パリの日本人たちを扱っている演劇「台風」は、かなり並外れた(ungewöhnlich)道を歩むことになった。今やヨーロッパから、ドラマにその文化が描かれんとしていた、その当の国へと移植されることになったのである。ベルリン座の幹部が伝えるところによれば、当地の日本大使館アタッシュ武者小路伯が作品の上演に立会い、ただちに日本語に翻訳することに決めたそうで、東京の「自由劇場」で今シーズン中にも上演の運びになるだろうとのことである。「自由劇場」は、すでに何度も本紙に登場したことがあるが、近代的な日本演劇を目指している集団である。

レンジェルのドラマは、因みにロンドン、ニューヨーク、ミラノでも上

演の準備が進められているが、ベルリン演劇友の会会員のために来週金曜日午後八時ベルリン座で特別公演が行なわれる⁹。

ニュース・ソースはどうやら「ベルリン座の幹部」のようで、「台風」が今まさに世界に向って渦を巻いて進んで行こうとする様子が報告されている。記事の要は、もちろん日本が「台風」の予想進路に入ったことを伝えるニュース価値にあるが、「並外れた」という表現には、あるいは驚きと当惑とが込められているかもしれない。後に紹介するように、『ベルリン日報』としては、つい何日か前に、もっぱら黄禍論に引き寄せた「台風」評を大きく載せたばかりだったし、しかも当然黄禍論論議にもっとも神経を尖らせているはずの日本大使館の人間がその翻訳に携って、当の日本で上演されるというのだから。

レンジェルの回想にも『ベルリン日報』にも登場する、この「武者小路伯」というのは武者小路公共^{きんども}のことである。1907年に東京帝大法学部を卒業後、外交官の道に進み、翌春からベルリンにあって駐独大使館の外交官補だった。伯爵でなく、子爵なのだが、これに相応するドイツ語はないようだ。武者小路家第11代の当主であり、作家実篤の長兄に当る。実篤の自伝的小説「或る男」にも兄はちらと顔を出す¹⁰が、1962年公共が亡くなったとき、彼は『心』誌に長文の「兄の思い出」¹¹を寄せ、兄がずば抜けた秀才だったために、いつも比べられて損をしていた話などを書いている。公共は、ドイツ語が非常によく出来ただけでなく、文学、芸術諸分野への関心も深かったようで、1913年帰郷した機会に音楽学校で講演し、ドイツのオペラや音楽の見聞談¹²をしたりしている。彼はその後外務省などに勤務したあと、1934年からふたたびベルリンに戻り、ほぼ3年間ドイツ大使をしたが、これが彼の外交官生活の最後であった。日独防共協定の締結は彼の在任中の仕事で、このため戦後に公職追放の処置を受けた。その後文筆活動に携わり、外交の裏話などを書いたが、それらを集めた幾冊かの一つに『滞欧八千一夜』がある。その中の一文「タイフーン」¹³は、レンジェルと「台風」上演の回想で、先ほどのレンジェルの回想をちょうど反対側から見て、補う関係にある。

これによると、あるとき大使館に「日本人ではないが、去迎西洋人でもな

い人」がやって来て、名刺を見ると「エミル、レンジエー」とあった、という。30数年も前のことについての回想だから、うろ覚えのところがあるのはやむをえない。『ドナウ河』¹³の著（邦訳あり）などで知られるエーミル・レンジェルの名と混同したものと思われる。「さりとて西洋人でない」というのは、風貌に半アジア的なところでもあったのか、それともユダヤ系であることを示唆したのか、いずれにせよ初対面の印象として後々まで記憶に残ったのだろう。武者小路はさらにレンジェルが語った言葉をも伝えている。それによると、とくに日本に何か重大事でも起ったような報道もないのに、自分の見た日本人は誰も彼も沈痛な顔色をしている。これはどうしてだろうと疑問に思っていたところ、ブダペストに帰ったとき、たまたま日本に駐在していた陸軍少佐に会い、話を聞くことができた。それは日本人の国民性だ、とりわけ支配階級には愛国、憂国に不必要なほど興奮している人が多い、というのがその少佐の答だった。彼はすっかり感心して、自分の国もそれを手本にすべきだと思い、この劇を書いた、というのである。武者小路はもらった台本をその晩のうちに通読し、あらすじを次のようにまとめている。

筋は主人公である日本青年及びそれを取り巻く是亦日本青年が、パリに留学して、毎晩集る度に、愛国憂国の話に花が咲くのであるが、青春の彼主人公「ニトベ、タケラモ」は、いつかパリ娘と相思の仲となつたが、ある経緯の後、彼女を絞殺した。處が友人ヒロナリはタケラモの秘密重大使命を達成させる爲、その身代りになろうとし、その下手人は自分であると自首し、遂にタケラモの使命を完成させる、と云ふ筋なのである¹⁴。

あらすじとしてはいろいろ足りないところがあり、それも拍子抜けすると言ってよいくらいだが、それだけに武者小路がドラマのどこに重点を置いて受けとめていたかが、あからさまに出てもいる。レンジェルが口にした言葉への彼の記憶も、このこととまっすぐ繋がっている。レンジェルが彼に向かって実際にそんなふうな話し方をしたのか、それとも武者小路が自分の印象に合わせて記憶の言葉を調合したのか、定かでない。黄禍論については、対ドイツ外交の第一線にあった人間として知らなかったことはありそうになく、

人一倍強く反応してしかるべき立場に置かれていたし、作品や作者の意図と直結させることの可否は別としても、実際この作品はその議論の格好のタネにされたのだから、まったく言及していないのは意外と言うほかない。そしてまた、それがこの回想の特徴だとも言える。彼が携わるはずの翻訳についても彼自身の口から証言がほしいところだが、これも残念ながら言及がない。ただ彼の作品理解から推して、翻訳することにとくに抵抗を感じるということとはなかっただろう。新聞に「上演に立会った」とあるのが、ドラマと舞台の成立に武者小路が関与したという意味なら、誤報であろうが、ひょっとするとこの記事がもとになって広まったのか、日本でもそのように信じられた。

このドラマに対する武者小路の批判と注文は、主として日本と日本人への作者の無知・無理解から、どんなにへんてこな舞台になったか、というところに向けられている。

翌晩私は他の館員数名と連れ立って、行つて見た。先づ目についたのは、毎晩集まると云ふ日本青年達五六人の服装と顔色だ。何とも云へぬ目尻の下がつた工合、それにチョビ鬚をつけ、眞赤や眞黄色のダラシない着物に細帯がけで、莫座の上に寝そべりながら豆をかちつて居る様子にウンザリさせられた。又舞臺に出て来る歐人同志の會話中に日本人は假面被り人種で偽善で、表面優しきでも、内心は恐ろしい人種だと批判する處もある。成程假面被り人種と批評させる爲には、顔も着物も變挺にするのがよいかも知れないが、餘りにひどい。

然し全曲を通じての印象は、日本人は見掛けとは凡そ違ふ鋭敏さを藏し、他の國人と全然別な、絶大な愛國精神に満ち満ちて、國の爲ならば何事をも犠牲にするに躊躇しない、と云ふ筋を強調して居るのであつた。

その劇の題名タイフーンの由来は、その劇の筋書の中に、大風が起つて日本の家が何千何萬と倒壊する。それは毎年秋になると起る災禍であるが、日本人は運命を甘諾しながら、嬉々として再建に全身を打ち込み、忽ちにして前より立派な家が建てられる、その不屈不倒さを見よ、と云つた處から来て居るのである¹⁵。

こうして武者小路は、筋や描写に不備・不満な点はあっても、また「日本人は假面被り人種で偽善で、表面優しそうでも、内心は恐ろしい人種だと批判する」登場人物がいても、それはあくまで登場人物の言葉とし、「全曲を通じての印象」としては日本人の愛国的精神が強調されているという意味でのプラスの評価を与えている。言い換えれば、彼自身の愛国的精神がそこで大筋肯定されていると見たのである。さらに彼の文学的教養は、愛国的精神が登場人物の言葉の一つ一つにあまりに神経を尖らせることを、あらかじめ防いだようである。批評を求めたレンジェルに対しては、服装や顔色があまりにひどいことを注意するにとどめたらしい。その後貴族院議長の徳川家達（俗に言う第16代将軍）が来たので、案内がてらもう一度カブリツキで見たが、舞台の日本人の顔も服装も少しも改善されていなかったそうだ。そして続く話のオチが何ともよく出来ている。その翌日、道で出会ったレンジェルは鬼の首でも取ったように、こう言ったという。振付の男にはよく注意をしておいたが、朝その男がやって来て言うには、昨夜二人連れの日本人がカブリツキで見物したので、よく観察したが、舞台上の日本人にそっくりだった、と。

レンジェルの回想と武者小路の回想との間には、いくつかの点でそのままでは両立しえない食い違いがある。たとえば、レンジェルの回想では初演の後で武者小路たちと初めて口をきいたことになっていたのに対し、武者小路の回想では、初演前日にレンジェルが訪ねてきて、台本と切符を置いていったとある。先後関係がまったく食い違っているわけだ。もっともこれは書き方のせいであってそうなただけで、事柄としては両立しうるのかもしれない。

「台風」のドイツ公演については、レンジェルと武者小路公共の回想の他に、『東京朝日新聞』文芸欄に次のような通信を見ることができる。

今此處のベルリイナア座で「タイフン」といふ芝居をやつて居ますが、作者は匈牙利人で、日本の留学生のことを仕組んだものの由。大變人氣が好い相であります。主人公の日本人の名がドクトル、タケラモ、ニトベと云ふのださうで、此のタケラモだけでも行つて見る氣がなく成ります。人の話によると中々能く日本人の特性を穿つてゐて、寧ろ日本人の美点を表

現して居る相ですが、タケラモに恐れてまだ見ません。（伯林にて藪柑子）¹⁶

これで全文である。何やらちょん切って出した文のような気配があるが、それもそのはず、この通信は夏目漱石が自分宛ての私信から記事に仕立てたものだ。この部分が漱石の何らかの思いに触れるところでもあったのか、前後の文脈もなく、はっきりしない。藪柑子というのは、前年の春からベルリン大学へ地球物理学の研修に来ていた寺田寅彦のことで、この頃から使い始めた筆名である。この通信からも当地の日本人社会で「台風」が好評であった様子が伝わって来る。武者小路公共の回想を当の時点で補い、ある意味では裏づけるような証言だと言えよう。平川氏は、寅彦のこの滞独通信を引用したあと、「寧ろ日本人の美点を表現して居る」と言った日本人をお目出度い人だったろうと一蹴しているが¹⁷、ベルリン在住の日本人たちがお目出度い人揃いだったかどうかはともかく、ドラマがそのように受けとめられたという事実の、とりあえずは貴重な報告と見るべきであろう。寅彦は他方で、自分はまだ見ていないと書き、よく日本人の特性を穿っているはずの、そのドラマの主人公が「タケラモ」というふうな恐るべき名であることをユーモラスに紹介している。それにしても、武者小路もそうだったが、「トケラモ」がいつの間にか「タケラモ」に変わるのは日本語の感覚から来るのだろうか。

『朝日』文芸欄は、さらにその数日後、ベルリン在住の廣政法天という人のいっそう本格的な紹介批評を掲載している。この人については、『演藝倶楽部』誌に「伯林の芝居」¹⁸という文章を書いているのを読んだことがあり、書きぶりからして演劇研究家でないかと思う。当時のドイツの演劇界について、シーズン、劇場、脚本、俳優などの傾向をととても要領よく解説していた。ベルリンでは帝室座、レッシング座、ドイツ座が三大劇場だったようで、「台風」を上演したベルリン座は中堅どころであろうか。

さて「伯林演劇二種」と題された廣政法天の「台風」紹介を見よう。

四週間以前から当地の伯林座で「タイフン」と称する日本劇がかかつて仲々好評を博して居る。殊に日本人の間に評判で、既に見物した人も少く

ない様である。作家は匈牙利のメルヒオル、レンギエルと云ふ無名の士で、題材は巴里や伯林に於ける日本人連の中心人物トケラモ博士に半世界的一婦人を配したもので、日本人通有の愛国思想と欧州的全人思想との衝突対照を描いたものである。…（中略）…

脚本として見れば結構に疎漏な點もあり、思想としても淺薄なものである。殊に第四幕で日本固有の愛國的觀念と歐州の思想とを對照して、後者の勝利に終る様に仕組んではあるが、其前提たるべき所、即ちタケラモの死乃至煩悶は彼が愛国の入形として生活し、生きた人間として言動しなかった爲であることが充分明瞭に表現されて居ない。タケラモは日本思想の化身としてよりも、寧ろ戀を失つて一時的忿怒の犠牲に成つた人物の様な觀があるは、此劇の大なる缺點と云はざるを得ない。併し真面目な研究的態度で、此作家が日本の思想感情及び周圍に對する觀察を發表して呉れたことは感謝すべきであらう¹⁹。

筋の紹介部分が少し長いので省略した。エレーヌ（ヘレーネ）の生業については、作者の指示がないために、さまざまな解釈が出されているが、この人は「半世界的一婦人」、つまり花柳界の女としている。しかし何と言っても、この筆者の特徴は、レンギエルの意図に副って、あくまで主人公トケラモの葛藤を作品理解の核におき、作品の限界をもそこから考察しようとしていることである。そして結構や思想の不十分な点を批判しつつも、作者の「真面目な研究的態度」に高い評価を与えている。

レンギエルの回想、武者小路の回想、寺田寅彦の通信、廣政法天の論評をこうして並べてみると、現地ベルリンにいた明治日本人たちが、いくつかの点で相互に解釈を異にしているとはいえ、「台風」劇を根本において歓迎していたこと、黄禍論をまったく問題にしていないことでは明らかに共通点を示している。変てこな名前や服装や態度などについての無理解や、さらに登場人物の発言なども、自分たちの日々の体験に照らしてであろうか、劇の受容に際して大した比重を占めなかったようだ。あるいは、あえて重きを置くまいとしたのであろうか。日本人や東洋人を舞台上に上せた先行のドラマやオペレッタなどと比べて、よりましかどうかという判断も働いたかもしれない。

2. 森鷗外における「台風」と黄禍論

（1）「棕鳥通信」と「台風」

『ベルリン日報』が報じていたように、すでにヨーロッパ各地で「台風」の上演が目論まれていた。好くも悪くも「台風」は、——モルナールの『悪魔』²⁰とともに——ハンガリーにおける「輸出ドラマ」の先駆けとなった。この「輸出ドラマ」という表現は、一方では、ハンガリー演劇がある種の成熟を示し、国外からも注目を受けるようになったことを意味するが、他方では、ルカーチが懸念したように、国境を越えての作品の市場拡大に照準が合わされ、世界観的芸術的追究がその犠牲になる危険をはらんでいた。この両面は、レンジェルのその後の人生と創造活動を検討する際にも重要な視点となるが、この意味で「台風」は彼にとって転換点であった。

さて、レンジェルの名と「台風」とを日本に最初に紹介した役回りは森鷗外に帰せられる。それは、鷗外が1909年3月から『昂^{すはる}』誌上に「棕鳥通信」²¹を連載し、ドイツの新聞を窓口に、ヨーロッパ諸国の文芸、学術、社会のさまざまなニュース、トピックを紹介し始めたのと、ハンガリーの「輸出ドラマ」の登場とがたまたま時期的に一致したからである。「棕鳥通信」は、期せずして新しいハンガリー演劇文化の生態の一端を証言するものとなった。ちょっと見にはひょこひょここと啄ばんできて並べただけと見えるものが、このように後で効果を現わしたわけだから、まさしく鷗外のいう「棕鳥主義」²²の見本みたいなものである。「棕鳥通信」の全体は、啓蒙家鷗外の巨大な業績と言うべきもので、同種の「水のあなたより」などと合わせて全集のまるまる一巻を構成し、900ページを悠に越す大篇だから、無目的にこれを通読する人はまずいないと思うが、視点の設定によっては結構面白い読み物になる。どういうわけか、私はこの鷗外の仕事を前にすると、雛の鑑別士を思い浮べる。オス・メスを一瞬に腑分けする、あの仕事である。もっとも神業のような手つきとともに、時折、記事を鑑別する鷗外の苦い顔つきがチラと見えるのも捨てがたい。

「棕鳥通信」には、1910年1月、新シーズンの上演題目の予告として「台風」が登場して以来、レンジェルの名が10数回出てくる。うち5回が「台風」関係である。レンジェルへの言及のほとんどは、新作を伝える、ごく短い情

報だが、中に1つ興味深い統計記事があるので、紹介しておこう。「ドイツ諸劇場での最近一年間の興行数」²³に関するものである。

シェーンヘア（信仰と故郷）	1623回
シラー	1584回
シェイクスピア	1042回
ズーダーマン	991回
ゲーテ	700回
レンジェル	700回
ハウプトマン	600回
イプセン	600回
ビョルンソン	486回
ヴェーデキント	215回

「最近一年間」というのは、ほぼ1911年秋からの1年間に当る。ということは、レンジェルが「台風」で名を知られて以来、まだ3年目だ。ドイツの劇場だけで1年に700回の上演とは驚く。「輸出ドラマ」としての果敢な健闘ぶりを手に取るように示す数値と言えよう。ゲーテと同数、師と仰いだイプセンを上回る数字である。第一位のシェーンヘアについては、鷗外が「労働」という題の彼の短篇を翻訳しているので、私はかろうじてその名前だけを知っていた。俄仕込みで言うと、カール・シェーンヘアは、ティロルの民衆劇を自らの創作に生かした劇作家で、「信仰と故郷」というのは、対抗宗教改革期のプロテスタントに対する迫害をテーマとした悲劇の題名らしい。

「棕島通信」第14回（『昴』1910年5月）は、「台風」の紹介を行なっている。これは、レンジェルに関するうち、もっとも内容豊かで、かつもっとも癖のある記事である。武者小路のところで「後に紹介する」と書いたのがこれで、以下その全文の引用である。

伯林で興行になった Taifun という脚本は大變なものである。作者は Magyar 族で Melchior Lengyel という男である。タイフンは大風で、颶風

をいふ。主人公新戸部トケラモは日本の名士で、歐羅巴で秘密の取調をするために、日本帝の派遣してゐる人である。秘密の取調は他日日本が歐洲を席卷する準備だといふことが、暗々裏に匂はせてある。此處は所謂黃禍論である。さて此新戸部が美人 Helène に迷つて美人の毒手段に陥り、一時の憤怒に委せて、柔術の手を使つて、美人を殺してしまふ。然るに新戸部の取調事務がまだ結了になつてゐないので、同郷の志士が争つて下手人にならうとする。其中の最も少いのはイノセ・ヒロナリといふ美少年である。それがとうとう代つて自訴する。法廷へ新戸部が出て、實事を打ち明けても、新戸部の人物があまり思慮深く見えるので、少年の方が下手人に極まつて處刑を受ける。それから新戸部は取調を終つて、過労と悔恨との爲に悶死するといふ筋である。大風といふのは新戸部が女を殺すときの怒気を形容したものであるが、陰には黃禍の形容といふ意味を持たせてあるらしい。民政党新聞の言草が好い。曰はく。多分此脚本は獨逸帝のお氣に入つて宮廷劇場で興行せられるだらうと²¹。

鷗外は出典を挙げていないが、2月20日付けの『ベルリン日報』に掲載された、F. E.署名の劇評²²に由来する記事である。「棕鳥通信」の窓口となったドイツの新聞については、あれこれ言及されているのを目にしたことがあるが、私がレンジェルとの関わりで調べた限りでは、すべて『ベルリン日報』であつた。ただ鷗外がこの一紙だけを読んでいたのかどうかは分らない。先に紹介した武者小路の翻訳の件についても、「棕鳥通信」は「Taifun を在伯林の日本大使館員武者小路伯が翻譯して東京自由劇場で興行するとか。(Berliner Tageblatt)」と、ごく簡略に要点のみを伝えたが、出典が明記されている。だが、上記の記事では出典どころか、かえって文中に「民政党新聞」という怪しげな表現が見え、これにうっかり引っかかると、振りまわされることになりかねない。つまり、現に振りまわされた私がそう言うのである。「民政党新聞」と言えば、民政党という政党の機関紙と思うのが普通ではないだろうか。鷗外は、他のところで Demokratie に民政主義という訳語を当てているから、民政党をも民主党と言い直してよいだろうが、この頃大新聞を機関紙にもつ、そのような政党があつた様子はなく、また『ベルリン日報』

をいくら引っくり返してみても、どこかの政党の機関紙だった気配もない。『ベルリン日報』と訳したのは Berliner Tageblatt & Handelszeitung というのが原名で、この新聞について、『新聞総覧』明治43年版は、「紙数十八萬、米国式の渦中に投ぜず、機敏に於欠くる所あるも地味にして実質ある記事を以て独逸人の人気に投じ、割合に広く行渡り、国外にも販路を有す。寧ろ商業に重きを置き或る程度まで政府に反対す。持主は猶太人モッセにして独逸の重なる新聞は大抵猶太人を以て資本主とせり。」²⁶と紹介している。つまり、同紙は穩健でリベラルな立場の新聞だったから、帝政派というのでもなく、社会主義的でもない傾向を鷗外はそんなふうに表示したのかとも思う。いずれにせよ、出典を明示しなかったのは、後に見るように、鷗外の記事が必ずしも『ベルリン日報』に忠実でないからであり、実体の怪しい名を用いたのは、さりとて自分に責任を負いたくなかったからだ、と私は推測するが、どうだろうか。

「多分此脚本は獨逸帝のお気に入つて宮廷劇場で興行せられるだらう」と鷗外が書いたところは、新聞記事ではこうなっている。「ハンガリー人のメルヒオール・レンジェルは、先祖からの東アジア人たちへの同朋感情にもかかわらず、指を立てて警告している。ヨーロッパの諸民族よ、汝らの聖なる財産を護れ！黄禍に注意せよ！健氣に良心的に彼はそう言う。私は、だから、この劇が他のすべての劇場で上演された暁には、帝室座の上演計画に取り入れられるだろうことを疑わぬ。」と。「ヨーロッパの諸民族よ」云々の言い回しが、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世の例の名高い黄禍の絵に添えられた文句に基づいたものであること²⁷、また帝室座（宮廷劇場）のレパトリーが皇帝の裁可なしに選ばれないことを鷗外は勿論知っていて、彼流に「獨逸帝のお気に入つて」というまとめ方をしたのだろう。ちょっと真似の出来ぬ見事なまとめ振りにはちがいない。

「棕鳥通信」には面白そうなトピックを手短かに伝えるだけのものが多く、その中では「台風」についてのこの記述はわりあい長いほうで、鷗外の意気込みが知れるというものである。「Taifun といふ脚本は大變なものである。」という評言は、中身が不明で、ちょっと受け止めにくいところがあるが、劇評の大きさに対する驚きの反応というにとどまらず、続く紹介内容から見て、

やはり黄禍論を念頭においてのことと考えられる。

もとの劇評ははるかに長く、全訳するわけに行かないが（またそれに値しないとも思うが）、「棕鳥通信」の記述と対照させてみると、鷗外の手つき・顔つきが見えて、すこぶる興味深い。何よりもまず簡潔にまとめあげる鷗外の練達の技に讃嘆の念を禁じえない。それとともに、外国の記事を紹介するということの難しさが実によく分る。事実を（あるいは事実と思って）伝えるだけの記事ならよい。間違えば、その訂正をも記事にできる。例えば『大風』の作者 Melchior Lengyel が Der grosse Fuerst と題する脚本を完成した。」という1911年の通信²⁸は、中身から言えばおかしい。Der grosse Fuerst（『偉大な領主』）とは、すでに4年前にブダペストで上演されたレンジェルの処女作のことだからだ。のちに『ニュガト』に掲載されたその序文²⁹から推定して、改めて本の形で出版されたのが新作と間違われたのだろう。それはともかく、鷗外はこれをあくまで事実としてドイツの新聞から伝えているのである。だが、劇評となると、そうは行かない。鷗外が手際よくまとめればまとめるほど、劇評者の表現から遠ざかる。しかも鷗外はまだ本を読んでいなければ、勿論上演を見てもいないのだから、評者の書いていることに對して適切なスタンスの取りようもない。だから、一方では受売りをし、他方では自分の言葉でまとめるという、重すぎる負担を背負い込むわけである。

鷗外文中の「柔術の手を使つて」というのは受売りのほうの例である。これは陪審員の好奇の質問の中に出てきた台詞にすぎず、ドラマの展開とは何の関係もない。これとは逆に、「新戸部の人物があまり思慮深く見えるので」という表現は、もとの劇評にはなく、説明不足を感じた鷗外が適当に（つまり不適当に）補ったものである。裁判所はトケラモを「思慮深く」どころか、被告の身代わりになろうとする胡散臭い人間と見た、というのがドラマの事実だった。また「大風といふのは新戸部が女を殺すときの怒気を形容したものであるが、陰には黄禍の形容といふ意味を持たせてあるらしい。」という文章は、前半部が評者の解釈（内容の当不当とは別に）にすぎぬものを受売りして事実表現として書いているとすれば、後半部は鷗外自身が付け加えたもので、自分の推量であるものを、評者の推量を伝える形に転化している。鷗外には、ドラマの展開に即した事柄と評者の判断・意見とを区別する術が

なかったが、出典が劇評であることを鷗外が明らかにしなかったこともあって、読者の受ける印象は、いっそう渾然一体とし、どこまでがドラマに内属し、どこからどこまでが評者の意見で、どこから先が鷗外の付け加えたものなのか、まるで読み取りようもないのである。それに私は鷗外、鷗外と当然のように書いてきたが、「棕鳥通信」は無署名記事だったから、それらはいっそう非個人的に、事柄そのものとして読まれてしまったであろう。鷗外は、ドイツの新聞と日本の読者の上にそれぞれ片足ずつを乗せ、かなりアクロバチックな姿勢でこの記事を書いているようだ。かつて中野重治は、鷗外における『『中略』のイデオロギー』³⁰を問題にしたが、翻訳紹介の場合にもいくつかのレベルでイデオロギー作用の介在を「邪推」してよいだろう。

(2) 鷗外の黄禍論批判

作品をもっぱら黄禍論との関わりで論ずるのは、もともと『ベルリン日報』の劇評がそうだったのだが、鷗外もそれに輪をかけた反応を示していると思える。鷗外はかねがねこの問題に深い関心を抱き、すでに日露戦争勃発間近い時期に「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」という2つの啓蒙的な講演を行ない、これらはそれぞれ冊子として刊行されもしている。また日露戦争中の陣中詠（「うた日記」）にも「黄禍」のうたが含まれている。彼は自分でこの問題を注視していただけてだけでなく、人々に注意を促す必要を感じ、適切に反響すべきことを説いてもいた。そういうわけで、この劇評は、彼としては一過することのできぬものだった。鷗外が劇評を通して、ドラマ自体にも関心をそそられたにちがいないことは容易に想像できる。翌2月21日の『ベルリン日報』は「台風」ドイツ語版の出版を伝えており、鷗外は出版社名を「棕鳥通信」に転載している³¹。また自分でもさっそくにも注文したのであろう。その時購入したと思われる一冊が現に本郷の東大図書館に残されていて、手に取ってみることができる。残念ながら、書き込み、下線など、彼がどう読んだかを示唆する手がかりは見られない。ただ翌1911年発表の短篇「妄想」にこの作品の内容への言及があるから、鷗外がこれを読んだことは間違いなさそうである。それどころか、平川論文は、前稿でも言及したように、同じ1910年の『三田文学』6月号に掲載された短篇「普請中」を、この作品との

関わりで生まれたというまことに刺激的な想定を行っており、これが肯えるるとすれば、「台風」そのものは忘れられたけれども、鷗外の創作の養分として、あるいは喚起材として働いたと言ってよいのだろう。

それではここで少し戻って、鷗外が「台風」に注目する前提となったと思われる、黄禍論に対する彼のかねてからの批判的関心に触れておこう。鷗外は、1903年6月6日国語漢文学会で「人種哲学梗概」について講演をした（同年10月刊行）。今のドイツをゴビノーとチェンバレンの人種本能思想が支配している、という判断に基づくものであった。A. de ゴビノー³²はフランスの外交官で、『人種不平等起源論』（1853-55）の著によって名高い。これは、本国のフランスではあまり重視されなかったが、晩年にドイツの音楽家リヒャルト・ワーグナーと知り合って親交を結んだことから、その尽力によりドイツで評判になった。『バイロイター・ブレッター』というワーグナー派の機関新聞がその宣伝舞台となった。その主筆シェーマンはゴビノーの翻訳者であり、ゴビノー協会の組織者でもある。鷗外は講演の大半をゴビノー説の紹介に当てている。黒人、黄色人、白人の人種区別と開化（文明）の度合とを結びつけるその説が、要するにヨーロッパ人のために我田に水を引くものであると彼は批判し、このような主張が耳目を集めるのは、「議論が偉大に見え」、「今の西洋の開化の破壊を予言し」、「他を開化する力の有る民、能化の民は、今も昔も唯だ ARIA 人種ばかり」と人種的自負心に訴えているからだ、と簡潔にまとめている³³。

しかし、鷗外は後の人種主義の展開にとっていっそう重要と思われる H・S・チェンバレンの方にはまったく触れていない。チェンバレンはワーグナーの信奉者で、娘婿でもあり、人種主義的世界観を根拠づける浩瀚な『十九世紀の基礎』³⁴を著し、ナチス運動の思想的先駆けとなった。不可避免な人種混交による人類の退化というゴビノーの説は、ブルジョア社会に対する彼の貴族主義的批判でもあったが、チェンバレンはこの貴族主義を拒絶し、人種とプロテスタンティズムを融合させて、一種の人種宗教をこしらえあげた³⁵。その信奉者は、エリートの一員であるとともに、茫漠たる多数者の一員でもありうる。これは大衆ナショナリズムに精神的基盤を提供するが、おそらくゴビノーには我慢できぬものだったにちがいない。鷗外は、あえて言えば、

貴族主義に対しては敏感に反応したが、ナショナリズムには皆目無防備だった——それを共有したがゆえに——のではなからうか。

ついで鷗外は、同じ1903年の11月28日、早稲田大学で「黄禍論梗概」と題する課外講義を行なった(翌5月刊行)。冒頭に彼は、この問題を「十年前當りから」ずっと研究してきたと述べている。やはり例のウィルヘルム二世の発言がきっかけになったのであろうか。ゴビノーの著作の研究もその一環だったにちがいない。鷗外によれば、黄禍論の研究は「敵情の偵察」にほかならない。彼はロシアとの戦争を早晩避けられぬものと考え、勝てば勝ったで負ければ負けたでどっちみち黄禍論が引合いに出されるだろうから、これを研究することは急務だと説く。講義は主にサムソン＝ヒンメルスチェルナという人の『道德問題としての黄禍』(1902)の所論を紹介する形で行なわれる。平和的黄禍(商工業上の競争に基づく)と戦争的黄禍への分類、中国と日本を種々比較し、日本よりはるかに大きい中国の将来への怖れ、ヨーロッパ人は黄禍をどう防ぐべきかの問題、等々が話の主な柱である。ヒンメルスチェルナは、黄禍が迫っていると認めながらも、もとはと言えば、それが暴力や利益吸取政策や宣教師の強迫がましい態度など、「從來歐羅巴人の爲した政略上の失錯」に由来するとし、まずそれを改めるべきことを述べる。そしてヨーロッパに対し、むしろ中国に習って、農業を盛んにし、労働社会の道德を高め、また道德を改良することを提起している。「道德問題としての」という表題の所以である。このドイツの黄禍論者はバルト系の人らしいが、鷗外の紹介だけによってみても、かなり冷静な議論展開をしているように私には思える。だが、どうやら鷗外は、「支那人を揚げ日本人を抑へる」論調に腹の虫が収まらないらしく、「日本人と角力を取りながら、大きな支那人の影法師を横目に睨んで恐れて居る」とし、「所詮黄禍論といふものは一の臆病論だといふことは、大略御了解になりましたらう」というふうなところへ話の結びを持って行っている。所詮「臆病論」にすぎぬのなら、初めから講究の労など不要であろう。「敵情の偵察」というには本書自体が不向きなようにも思うが、折角この本を選んだのなら、著者の反省的態度を見習ってもよかつただろう。講演の結びの調子は、かえって「台風」第1幕で日本人たちが内輪で氣勢を上げていた場面を思い起こさせる。

鷗外は彼の出発点の問題意識を次のように述べていた。

御承知の通り黄禍と云ふ語は白人種と黄色人種との争闘から、新たに生れて来た語でゐりまして、白人の側で黄色人に對して抱いて居る感情を表して居るのであります。私は此感情は吾人の詳に研究して置かねばならぬものだと思つて居ります。何故といふに吾人黄色人は、先頃の北清事件でのやうに、往々白人等と鑢を並べて進んで、却つて他の黄色種族と争ふやうな勢になつて居りますが、又現に英國と同盟して、東洋の平和を維持しやうと勉めて居りますが、此同盟國や我邦に對して昔から多くの同情を持つて居る米國は姑く置くとして、一般の白人種は我國人と他の黄色人とを一くるめにして、これに對して一種の厭惡若くは猜疑の念をなして居るのでありますから、吾人は嫌でも白人と反對に立つ運命を持つて居ることを自覺せねばなりません、これを自覺すれば、所謂黄禍の研究は即ち敵情の偵察でゐりまして、兵家に申させると、彼を知る一端なのであります³⁶。

これを読むと、鷗外が「白人種と黄色人種との争闘」を出発点におき、「吾人は嫌でも白人と反對に立つ運命を持つて居る」と、黄禍論者と基本の認識を同じくしていたことがよく分る。「予は世界に白禍あるを知る。而して黄禍あるを知らず。」という彼の言葉は、同じ基本構図をそのまま裏返したものである。彼はロシアが「人道に逆ひ、國際法を破る」と批判したが、「人道」や「國際法」の遵守はもちろん人種区分と何の關係もない。あるいは鷗外はそんなことは承知で、むしろロシアとの戦争において日本がそれを守ることを期待して、あえて書きつけたのであろうか。誇りうる日本にするという、いわば日本第一主義が彼の立場であつたと考えられる。だが、「先頃の北清事件でのやうに、往々白人等と鑢を並べて進んで、却つて他の黄色種族と争ふやうな勢になつて居ります」と彼が書いた際、いずれにしろ、その「他の黄色種族」の人たちの悲鳴は彼の耳に届いていそうにない。

「台風」の劇評をドイツの新聞で見たとき、黄禍論にこのように神経を尖らせていた鷗外がさっそく飛びついたのは当然と思われる。だが、注目すべきは、実際に「台風」を手に入れて読んだと想定される時期以降、この作品

との関連で彼が黄禍論についてまったく口を噤んでいることである。彼が新聞の劇評から予想し、それに基づいて紹介したことでと現物を手に入れて読んで受けた印象との間にかなりズレがあったせいではないかと推察するが、はっきりしたことは言えない。それがどうあれ、彼自身その劇評の尻馬に乗って書いたからには、それなりの後始末も必要だったと思われるのだが。

その後彼が唯一「台風」に言及したのが、先述したように『妄想』である。これは一老翁の人生の述懐という形をとった自伝的短篇で、その中に次のような件りがある。

日本に長くゐて日本を底から知り抜いたと云はれてゐる獨逸人某は、此要約は今闕けてゐるばかりでなくて、永遠に東洋の天地には生じて来ないと宣告した。東洋には自然科学を育てて行く雰囲氣は無いのだと宣告した。果してさうなら、帝國大學も、傳染病研究所も、永遠に歐羅巴の學術の結論文を取り續ぐ場所たるに過ぎない筈である。かう云ふ判断は、ロシアとの戦争の後に、歐羅巴の當り狂言になつてゐた Taifun なんぞにも現れてゐる³⁷。

文中「此要約」とは、學術研究を育てる条件をいう。「要約」は珍しい語法だが、要をなす条件と言へば、もう少し厳密であろう。「文化の国」ドイツから、それが欠けている国へ帰るのは、若い鷗外（翁をとりあえず鷗外として）にとって心残りだったはずである。日本を底から知り抜いているとされるドイツ人が言ったように、日本に「自然科学を育てて行く雰囲氣はない」ことを、鷗外もある意味では認めざるをえなかっただろう。それでも彼は、その雰囲氣は「まだ」ないのだと敢えて主張する。いずれヨーロッパに學術を輸出する国になるだろう、と希望するのである。「台風」への言及も、そのドイツ人の「宣告」に対する不満の延長上でなされている。しかし鷗外は、ここで「台風」を引合いに出したとき、はたして作品のどこを念頭に置いていたのだろうか。たしかに思い当たる箇所がないわけではない。デュボン教授たちが帰って行った後の、日本人だけの会話のなかに、「かれら〔ヨーロッパ人たち〕は考え、仕事しさえすればよいのだ。賢い成果が生まれ出たら、

我々が頂戴しよう。」という吉川のセリフ³⁸が出てくる。だが一登場人物のセリフにすぎないことは別としても、これに対しては、ヨーロッパを見くびってはいけない、これを凌駕するためには我々は非常な勤勉さを要する、と直ちにトケラモが窘めもしている。一方ベインスキーは、日本がヨーロッパの物まねばかりしていると批判していた³⁹。このベインスキーの言を作者の代弁と取るとしても（因みにベインスキーというポーランド系の命名は作者の名「レンジェル」がハンガリー語で「ポーランド人」を意味する点で興味深い）、日本の物まねを批判したその彼は、むしろヨーロッパが物まねされるに値しないと考えていたのである。しかし、いずれにしても、科学を育てる条件が日本に永遠に欠けているというようなことは、作品のどこにも問題とされていないようだ。

驚くべきことに、鷗外の解説者の一人⁴⁰は、さらに一步を進め、この箇所をもって、鷗外が「台風」に「黄禍論と揆を一にする或る種の人種観上の傾向」を見ていた証左としている。つまり、そのドイツ人を鷗外が黄禍論者・人種主義者だと見ているという前提に立っているわけだ。たしかに東洋と科学がどこまでも相容れないという主張は、人種主義的な考えに繋がりがかねないところがあると思うが、鷗外としても、おそらくは日本に自然科学を根付かせるべく実地に教育に与り、深い蹉跌を味わったにちがいないそのドイツ人の心情が痛いほどよく分ったのではないだろうか。ここでの註に黄禍論を持ってくるのは少し場違いではないかと思う。いずれにせよ註をつけるとすれば、何よりもまず、作品のどの箇所を念頭に置いていたか、鷗外の明示していないそれを指示した上でなすべきであろう。

さて鷗外は、引用に続く箇所では、もう一つの「心残り」として、彼を引きとめる「白い、優しい手」があったことを書いている。にもかかわらずの帰国であった。感情の行き違いから愛人を殺し、そのために帰国を思いとどまり、異国に果てるトケラモの運命は、鷗外にいろいろと思いを誘うものであったにちがいない。「台風」への言及から「白い、やさしい手」へと、「妄想」の文が流れて行くことのほうは、私にもよく分る。

「台風」のベルリン上演については、鷗外が紹介したドイツの劇評と武者小路公共の回想や寺田寅彦の通信に見られる在ベルリン日本人たちの反応と

では、ほとんど正反対の関係にある。このことは、現在のわれわれには狭苦しい愛国主義的言動と見えかねない日本人登場人物たちに、明治末期のベルリン在住日本人たちは自分自身の姿を認めて肯定し、他方ドイツ人観客——鷗外の紹介一つから一般化するのには乱暴だが——はそれによって威嚇され、あるいは少なくともあらかじめ抱いていたそのような懸念に相応するものを感じた、ということを示しており、この反応は互いに他を強めあい、あるいはむしろ他によって互いに自らを強めるという意味では、一対のものとも言えるであろう。「愛国人形」からの脱皮にドラマの核心を見て共感する廣政法天の紹介論評などは、この文脈においてみると、珍しい例外のようだ。

こうして「台風」のベルリン公演は、直接その舞台を見ることができた人はごく限られていたが、主に新聞・雑誌を媒体に、さまざまな回路で日本に伝えられた。だが、これらは相反する反応を包み込んでいることもあり、作品に興味を呼び起こされた者にとってはいささか隔靴搔痒の感があつたにちがいない。その意味では、ドイツ語版からの邦訳がなされたことは、大きな空隙を埋める行為であった。だが、これについては次に述べることにしよう。

註

- ①丸山圭一「『黄色い猿』の血は赤かったかーレンジェルの日本人劇『台風』と黄禍論問題」、『金沢大学経済学部論集』第22巻第1号（2002. 11）掲載。
- ②ベルリン公演は、1910年2月19日が初演であった。
- ③Melchior Lengyel: *Taifun*, Rütten & Loening, Frankfurt a. M., 1910
- ④A<Taifun> Berlinben és Bécsben, “*Világ*”, 1910. jun. 1.
- ⑤A<Taifun> Bécsben, “*Világ*”, 1912. feb. 21
- ⑥Lengyel Menyhért: *Életem könyve*, Gondolat, Budapest, 1987, p. 74
- ⑦森鷗外の「棕鳥通信」にこれを裏づける記述がある。「日本の伯林大使館は井上勝之助時代に、居宅と事務所とを別にして、大使は Tiergartenstrasse 16に事務所は Blumeshof 12に置いたのだが、（其前は二つを一しよにして Kroll's Etablissement の傍の Vogt の家に置いてあつた）此度合併して Koenigplatz 4に越した。アメリカの Tower のゐた跡へ越したわけである。」（『鷗外全集』第27巻、岩波書店、p. 502）レンジェルの仮寓は Blumeshof 7であった。
- ⑧Lengyel Menyhért, 同上, p. 74-75
- ⑨“Taifun” in Japan, *Berliner Tageblatt & Handelszeitung*, 1910. Feb. 26.
- ⑩武者小路実篤「兄の思い出」、『心』1962年6, 7, 8, 9, 10, 12月号

- ⑪武者小路公共「獨逸は音楽の國」、『読売新聞』大正2年11月18日
- ⑫武者小路公共「タイフーン」、『滯欧八千一夜』、暁書房、1949、p. 158-66
- ⑬Emil Lengyel : *Die Donau* なおその邦訳、エミール・レンギル『ダニューブ』（1942、地平社）の訳者伊藤敏夫とは、紅野敏郎によれば、埴谷雄高である。『昭和文学の水脈』（講談社、1983）、p. 58、参照。
- ⑭「タイフーン」、同上、p. 162
- ⑮「タイフーン」、同上、p. 163
- ⑯「通信」、『東京朝日新聞』、明治43年4月13日。なおこの文章は「先生への通信」としてまとめられ、寺田寅彦の最初の随筆集『藪柑子集』に収められた。
- ⑰平川祐弘「『普諸中』の国日本——森鷗外の短篇とレンジェルの人種劇『颱風』をめぐって——」、『和魂洋才の系譜』、河出書房新社、1971、p. 252
- ⑱廣政法天「伯林の芝居」、『演藝倶楽部』大正2年1月号、p. 104-112
- ⑲廣政法天「伯林演劇二種（二、日本劇「タイフーン）」、『東京朝日新聞』、明治43年4月22日。なお前日に主にハウプトマンを論じた「伯林演劇二種（一）」が掲載されている。
- ⑳Molnár Ferenc : *Az Ördög*, 1907. 因みに鷗外には『悪魔』の梗概もある。
- ㉑「棕島通信」、『昂』誌上に、その第1年（1909）第3号から終刊の第5年（1913）第12号まで55回連載（途中3回休載があったのみ）。のち『鷗外全集』第27巻に収録。
- ㉒「棕島主義」という鷗外の考えについては、「洋学の盛衰を論ず」、「混沌」など参照。
- ㉓「棕島通信」、『鷗外全集』第27巻、p. 755
- ㉔「棕島通信」、同上、p. 171-2
- ㉕F. E. : Taifun, *Berliner Tagesblatt & Handelszeitung*, 1910 Feb. 20.
- ㉖『新聞総覧』明治43年版、日本電報通信社、p. 69
- ㉗黄禍の絵については、丸山圭一「『黄色い猿』の血は赤かったかーレンジェルの日本人劇『台風』と黄禍論問題」、同上、p. 63-64参照。
- ㉘「棕島通信」、同上、p. 597
- ㉙Lengyel Menyhért : A nagy fejedelem. Hatvany Lajosnak. A Nyugat kiadásában legközelebb megjelenő dráma előszava, *Nyugat*, 1912, I kötet. p. 256-59
- ㉚中野重治「鷗外『中略』のイデオロギー」、第二次『中野重治全集』（筑摩書房）第24巻
- ㉛「棕島通信」、同上、p. 173
- ㉜Comte Joseph Arthur de Gobineau : *Essai sur l'inégalité des Races Humaines*, 4 Vol, Paris, 1853-55. 鷗外はその独訳 *Versuch über die Ungleichheit der Menschenrassen* (Stuttgart) を用いている。
- ㉝「人種哲学梗概」、『鷗外全集』第25巻、
- ㉞Houston Stewart Chamberlain : *Die Grundlagen des Neunzehnten Jahrhunderts*, München, 1899. 邦訳 H・S・チェンバレン『新世界観の人種の基礎』（保科胤訳）、栗田書店、1942、但し部分訳。
- ㉟Detlev Clausen : *Was heisst rassismus?* Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1994, p. 92

- ㊸「黄禍論梗概」,『鷗外全集』第25巻, p. 539。鷗外が講演の土台として利用した原本は, H. von Samson-Himmelstjerna : *Die gelbe Gefahr als Moralproblem*, Berlin, 1902である。
- ㊹「妄想」,『鷗外全集』第8巻
- ㊺Melchior Lengyel : *Taifun*, 同上, p. 37
- ㊻Melchior Lengyel, 同上, p. 31
- ㊼小堀桂一郎「解説」,『鷗外選集』(岩波書店, 新書版), 第3巻